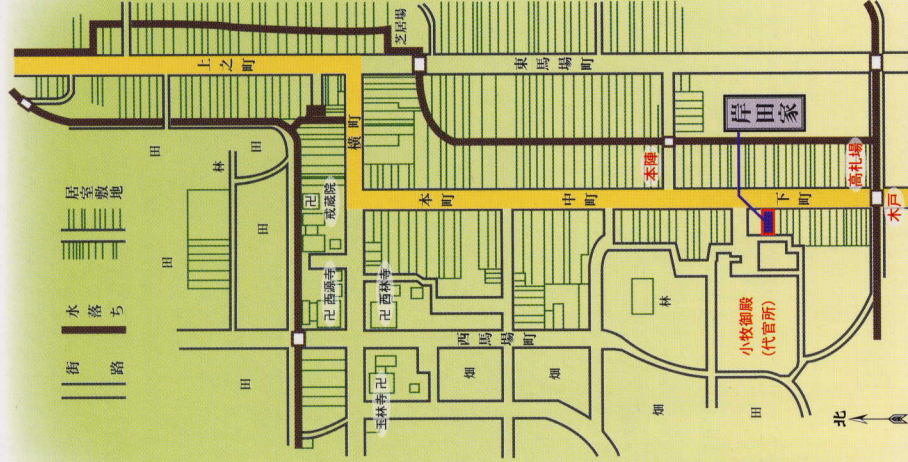




## 宿場町の町並み



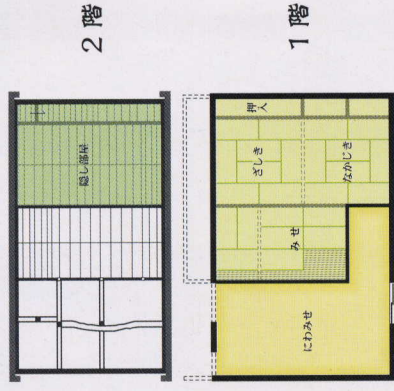
### ◆宿場町の町並み◆

小牧宿は、名古屋と中山道を結ぶ尾張藩の上街道（木曾街道）沿いにつくられた宿場町です。宝暦年間（1751～64）のものとして推定される『小牧宿絵図』から、下町・中町・本町・横町・上之町に区割りされていたことがわかります。また、この街道の東側には東馬場町、西側には西馬場町も形成されていました。小牧宿には、他の宿場町同様、間口が狭く奥行きの深い町屋形式とよばれる地割りとなっていました。

町の南端には木戸があり、木戸を入ったところに高札場がありました。下町の西側には尾張徳川家の別荘・小牧御殿（後には小牧代官所）があり、この岸田家は、御殿の入口の辻から南へ2軒目・3軒目の敷地にあたり、この絵図が書かれた当時は、まだ、建てられていないことがわかります。小牧宿の本陣を代々務めた江崎善左衛門の屋敷は、下町と中町の境界付近にあり、間口六間半の大きさでした。中町・本町は商人の家屋が多く、まっすぐ北上すると、戒蔵院に突き当たり、戒蔵院から東が横町で、街道は横町から北へ鍵状に曲がり北上すると、そこが上之町です。

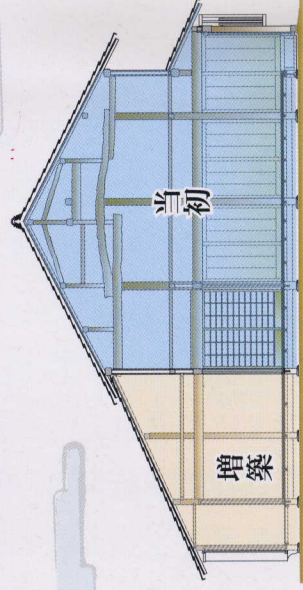
## ① 岸田家当初の姿

▼一八〇〇年頃▼



1800年頃、図のように土間・板の間と2室の座敷からなる一般的な町屋として建てられました。この家の特色の一つは2階に斜めの梁（登り梁）を使った部屋があることです。これは人が立って歩くとさじやまにならないための工夫ですが、当初、この部屋には窓がなく暗室でしたので「隠し部屋」と呼ばれており、「さしき」の押入から昇降するようになっていました。その用途は不明です。

## 岸田家の特徴



岸田家断面図

## ② 岸田家 大改造後の姿

天保年間（一八三〇～四三）

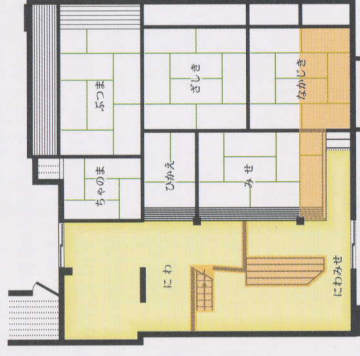


天保年間（1830～43）に、図のように背面側を増築する大改造が行われます。これにより、三列の部屋を持つ大規模な町屋になりました。「なかにき」は、前半分を土間とし、通り庭から入る玄関の間になりました。庄屋を務めることで、武士などの身分の高い人の出入りがあり、玄関の間が必要になったのでしょうか。出格子付きの窓は1・2階ともこのとき作られ、立派な外観となりました。

今回の修理では、この時代へ復元しました。

## ③ 岸田家 明治維新後の姿

明治維新後（一八六三～）



明治維新をむかえて、岸田家は度量衡の商売を始めました。そのために「にわみせ」には縁台を設け、板の間の「みせ」を拡張しました。また、玄関の間は必要なくなつたので、再び八畳の「なかにき」に戻されました。明治24年にこの地方をおそった濃尾大地震でも、岸田家住宅は軽快な構造が幸いして倒れませんでした。岸田家がゆがんだり壊れたので、屋根や土間に補修と補強が行われました。これが修理事業直前の姿です。

住宅建築には、武士などが使用していたいわゆる書院造りの住宅や茶室のほかに、庶民が使用した民家があります。民家は、都市生活に適した町家、農村生活に適した農家、漁村生活に適した漁家などに分かれますが、岸田家住宅は町家に属します。

町家は、都市の建築ですから表通りに面して建ちます。そして表通りから裏庭までぬける土間があり、土間にそって板の間や座敷があります。このような土間は表通りから入りやすく、町行く人々と交渉したり、家で生産したり買入れた商品を売り買いするのに適しています。

岸田家の土間「にわみせ」は、そのような場所であり、これに面した板敷きに仕切りがなく「みせ」と呼ばれるのは、そこが主たる交渉の場であったからです。このように岸田家住宅の姿は、小牧宿という都市の姿を残しています。

岸田家のもう一つの特徴は、「なかにき」を玄関に改造したこと。このような町屋はめずらしく、岸田家の当時の立場を示しています。

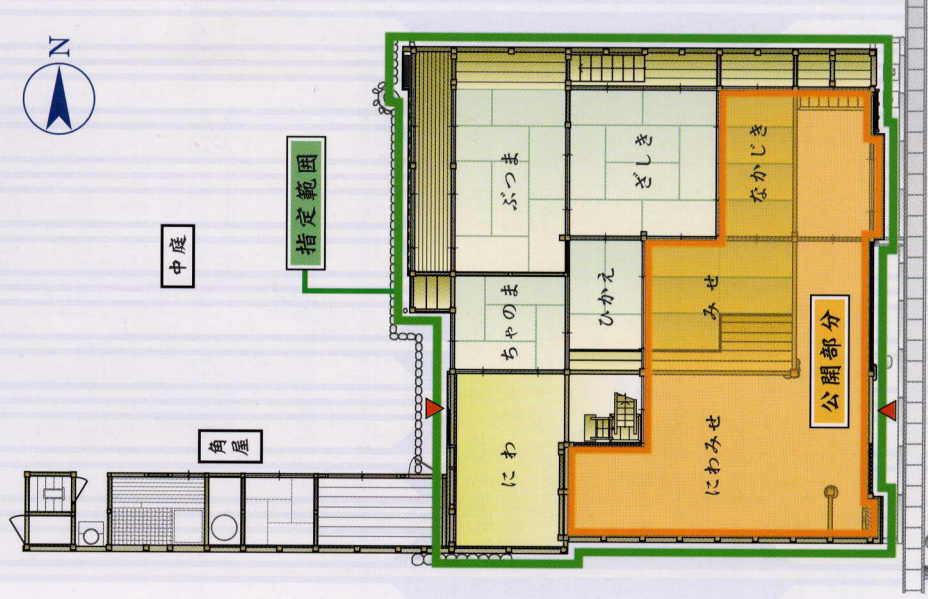


岸田家の「みせ」

この建物は、昭和63年に小牧市指定有形民俗文化財に指定された江戸時代の小牧宿の民家の姿を今に伝える貴重な存在です。築後約200年と推定される建物の痛みが進んできたため、ご当主の岸田宗喜氏が、小牧市指定文化財修理費補助金対象事業として、平成12～13年度に半解体修理事業を行い、現在の形によりえられました。今回の修理では岸田家が庄屋を務め、小牧宿の中で重要な位置を占めた幕末頃の姿に復元修理を行いました。ご当主のご好意により、一部を公開していただいていますので、ゆっくりにご観覧ください。

平成14年6月

小牧市教育委員会

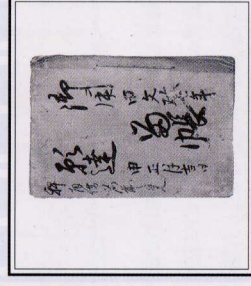


## 岸田家

古くは岡島姓を名乗る旧家で、天保年間(1830～44)に岸田七右衛門不磷が、代々小牧宿の本陣・小牧村の庄屋を務めてきた江崎家から養嗣子となり、小牧の名家江崎家と深いつながりを持つようになりました。岸田七右衛門は天保川の開削などに尽力し、岸田家には小牧村の庄屋が江戸時代末期に書き記した古文書が多数残っています。岸田家の屋敷は小牧代官所の東に位置し、脇本陣としての機能も果たしていました。

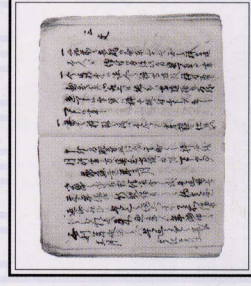
## 岸田家文書

岸田家には多くの古文書が保存されていますが、そのうち代表的なものを紹介します。



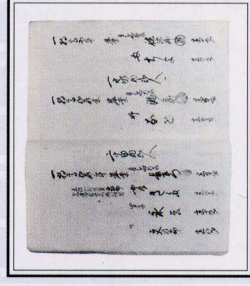
■ 御用願達留帳

藩や代官所からの達書や触書、下からの願書や届書を書きとめたもの。岸田家には、文政元年(1818)から慶応2年(1866)にわたって小牧村庄屋が書き留めた御触状留記・御用願達留帳が残っています。



■ 御触状留記

藩や代官所から通達された法令は村々を回達し、庄屋は写しをとって次へ回した。その写しの記録。



■ 人別御改帳

農民人口の把握のために行われた人口調査の帳簿、現在で言えば、戸籍謄本のようなものです。